

菊川西中だより

校長室の窓

37年間で子どもたち
からたくさん
学びました!!



学校便りを書かせていただくのもいよいよ最後になりました。私の「**教職人生**」も残すところ約1ヶ月となりました。「良い語り手は、老人に対しては過去を、若者に対しては未来を語る」と言う言葉を聞いたことが有ります。以前も書きましたが、私は学校便りを書かせて頂くにあたって「子ども達の日々の様子は学校 HP(1日2回、年365日更新)でお伝えしよう。その代り、学校便りでは自分の**これまでの教職生活の中からエピソード**を取り、それを肴にして、保護者の皆様や地域の方々に**子ども達の未来に対する私の思い**を語ろう」と決めていました。そういう意味で、本校の情報発信は「学校 HP」と「学校便り」の併せ技で成り立っていると言えます。それを4年間続けさせて頂きました。「学校便り」というもののイメージからすると、**ちょっとはずれたものだったかも知れませんが**皆様はどのように感じられたでしょうか?

さて、表題の言葉です。私が以前聞いた言葉に「先生と生徒の違い」というものがあり、『**先生が生徒を教えると思っているのが生徒。先生は生徒を教えるが、生徒からも教えられているのが先生。**』と言うのがその答えだということです。私の37年間を振り返ってみると生徒から教えられたことが山のようにあります。学校便り9月号(H30/8/28発行)に書きましたように、部活の現役時代、全国大会には縁が無かった私です。顧問をした水泳部と陸上競技部の子ども達が私に全国大会を教えてくださいました。校長になってからも昨年度、本校の陸上競技部の浅井、松下、丹羽の3選手が私を熊本県の陸上競技場へ連れていってくれました。部活動の顧問をやらなくなって20年近く経っていたので、ワクワクしながら久しぶりの全国大会の雰囲気を楽しませて頂きました。

こんなことも有りました。「中学校荒れの時代」の事です。最悪の荒れから抜け出そうとしていたある中学校で3年生の女子生徒5、6名が2年生をトイレに呼び出し、「あんた、生意気よ」と威圧する事件が起きました。先生たちは当然、当事者を呼んで厳しく指導したのですが、その中の一人が「**私ら去年、こんな事を何度もやられて、ずっと我慢してきたのに、何で私らは一回やっただけで、こんなに怒られなくてはならないの**」と泣きながら私達に訴えました。私は、この年に転任してきたので前の年の事は知らなかったのですが『この子達、辛かったんだなあ』と目頭が熱くなります。そして、別の学校へ転任した時、似た事件が起こり、夜まで指導しました。しかし彼女達は目を三角にして先生たちを睨んでいます。以前の事を思い出した私は『みんな、ごめんな。先生達がしっかり見てやれなかったために、あなた達にこんな事をさせてしまったんだね。本当にごめんな。』というと、彼女たちの目から大粒の涙がこぼれます。続いて1年生からずっとこの子達の学年に所属していた若い女の先生が『ごめんね。私は一年の時からずっとあなた達と一緒にだったのに……私のせいだよ。……』と続けると、彼女たちは大声を上げて号泣します。私達の指導を彼女達が受け入れた瞬間でした。「子ども達は自分でも良いこと、悪いことはちゃんと分かっている。『そうしてしまった心情』に気づいて欲しかったんだ。」という事を子ども達から教わりました。

理科の授業でこんなことが有りました。1年生の『状態変化』の単元です。私は、鉛の融点(固体から液体になる温度)を測定するように指示し、子ども達に340℃まで計れる高温温度計を渡しました。鉛の融点は300℃です。測れるはずですが。ガスバーナで加熱された鉛がうつぼの中で液体になります。ここで温度計を入れれば『鉛の融点は300℃』と測定できます。しかし、実験に不慣

れな1年生です。あやまって温度計を奥まで突っ込んでしまい、るつぼの底に触れてしまいました。温度計は鉛の温度ではなく、ガスバーナで加熱されているるつぼの温度を拾い、『ぼん』と言う音とともに温度計は破裂し、液体となった鉛が見ていた子ども達の目の中に入ってしまった。(この頃、安全ゴーグルの使用を文部科学省も強調していませんでしたし、生徒用ゴーグル自体、この学校には有りませんでした) 養護教諭が駆けつけ、2人の生徒の目を水で洗浄して、飛び込んだ鉛の塊を洗い出してくれます。そして、病院に連れて行ってくれました。病院で診察を受けたところ目に異常は無く、2人の生徒は無事でした。車の中で養護教諭が「こんな危険な実験をするなんて、困った先生だね」と子ども達に言ったそうです。すると子ども達は「**今回のことで、森田先生を責めないでください。この事で、森田先生が実験をやってくれなくなる方が、僕達にとって困ります。毎時間実験する理科がとっても楽しいんですから。**」と言ったといいます。この話は病院から帰ってきた後、養護教諭が「**あの子達、こんな事言ったんだよ**」と、私に話してくれたものです。私は『子ども達の期待に応えられるように、もっと、もっと楽しい授業をやるぞ』という思いとともに『**子ども達を危険にさらすような事が二度とないようしよう**』という思いも持ちました。これも、子ども達から教えてもらった大切なことがらです。

ある日、6年生のYちゃんが一冊の本を校長室に持って来ました。「校長先生、この本とってもいいのでみんなに紹介したいんですけど。校長先生も読んでください……。」Yちゃんは図書委員長でした。そう言って手渡してくれた本は「**みーちゃんがお肉になった日**」です。……男の子がいます。お父さんは屠殺場で働いています。毎日、牛や豚を殺す仕事で『俺この仕事やめようかな』と時々洩らしています。ある日、学校で「お父さんの仕事」という題の作文が出されます。この子は「僕のお父さんは肉屋です……」と書きます。これを読んだ担任の先生は『あなたのお父さんが仕事をしてくれるから、私たちはお肉が食べられるのよ』と話します。女の子がいます。家では牛を飼っています。女の子は子牛に「みーちゃん」と言う名前を付けてかわいがります。とうとう、みーちゃんを出荷する日になり、お父さんの屠殺場に連れて行かれます。お父さんが鉄砲のようなものをみーちゃんの額に押し付けて言います。『動くなよ。急所をはずすと、余計苦しむからな』みーちゃんは自分がどうなるのか知っているのか、悲しそうな目でお父さんを見返し、じっとしています。お父さんは引き金を引き、みーちゃんはドタッと倒れます。女の子の家にお肉になったみーちゃんが届け、みんなで食べます。『**いただきます。みーちゃん、おいしいね**』……ある小学校でこの本を子ども達に読ませると、給食の残量が少なくなったといいます。本校の修学旅行の時です。お坊さんの話を聞いてきた子ども達は、旅行の間中、食事のたびに『喜びと感謝と**敬いの心**を持って**いただきます**』と、声を掛けて食事を始めました。私は子ども達に『(命を)頂くのが食事』、『(命を)敬うのが食事』という「命の尊厳」について**教えられました**。

いよいよ最後です。Yさんは、中2の時不登校になってしまった子です。私はこの子の補習を買って出ました。「教室へもどった時、勉強に遅れが出ないようにするためだよ」と言って、数理英の3教科を教えました。Yさんは卒業の時、手紙をくれました。●(引用)●勉強会をすっばかし、学校を休む日が多くなると、家まで迎えに来てくださったり、勉強のできない私に分りやすく教えてくださったり、気持ちが沈んでいる時には明るい言葉を掛けて下さったり、……私は先生のおかげでポジティブに考えられるようになり、勉強も並にできるようになって、自殺を考えた時期もあったけど、先生のおかげで高校にも受かったし、**英語も好きになったし、勉強の楽しさにも少しだけ気が付くことができました。学習会が楽しみになってきました**。「僕は勉強しか教えられないから……」と言って全力で教えてくれて本当に嬉しかったし、先生の授業で、未来が明るくなった気がしました。……私は先生と出会って、180°人生が変わった気がします。●(終わり)●「**私はあなたに教えた事の2倍もたくさんあなたから学んだよ。**」読み終えた私は、心の中でこうつぶやきました。

私は37年間、子ども達から「たくさんのプレゼント」をもらい、「目いっぱい成長させて」もらいました。私を成長させてくれた**たくさんの子供達と、教頭、校長と7年間、たくさんの思い出をくれた菊西中に感謝**して筆を置きたいと思います。校長として勤めた4年間、たくさんの御支援本当にありがとうございました。
文責 校長 森田昌浩